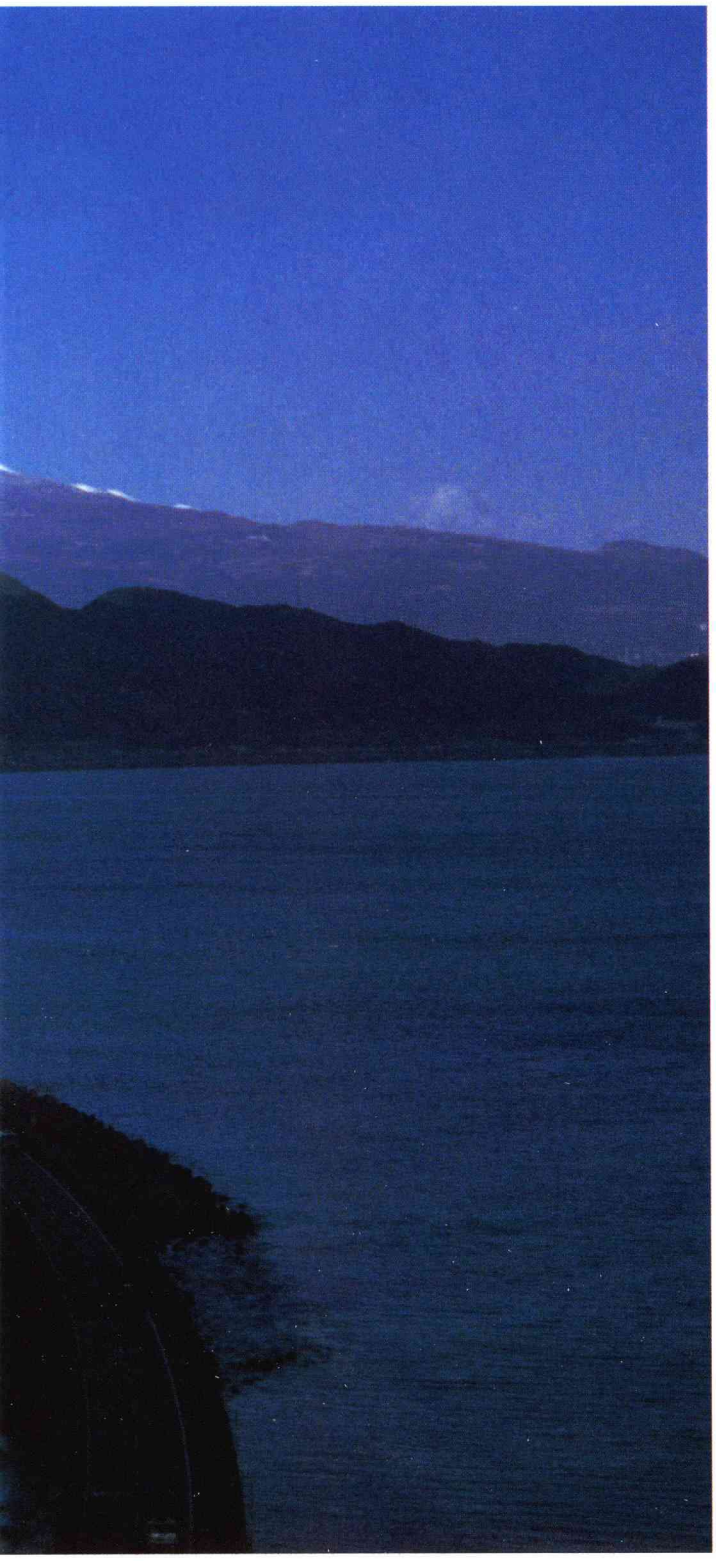
鉄の絶景

Steel Landscape.

旅景色の鉄〜静岡

太平洋に面した東海道は、鎌倉時代より国内の最重要幹線としての役割を果たしてきた。国道1号線、新幹線と平行して走り、富士山と海岸線とを臨む眺望で知られる東名高速道路。静岡の由比町にスポットをあてる。



由比の海岸線を走る東名高速道路

市民に親しまれてきた東海道の旅

江戸時代の末期に日本を旅したオランダ商館の医師、シーボルトは、その道中の観察から、あることを発見した。

ヨーロッパやアジアの他の国の人々と比べて、旅行というものをこれほど気軽に、一般的に行なっている国民はいない。大名たちは参勤交替で一年置きに領土と江戸とを行列で結ぶ。商業的な流通も活気があるし、伊勢参りのような巡礼旅行も盛んに行なわれる……。

この時代の日本では、すでに旅がひとつのシステムとして完成されていた。街道の整備、宿泊施設や、馬、渡し船といった輸送手段の充実。これらはすべて、参勤交替という特殊な制度の産物であることはいうまでもないが、そうやって人々が国中を行き交うことになれば、土産話を通して見識も広まり、ぜひ自分もという気運も高まっていく。一般庶民もまた、旅から戻った人たちの諸国でのエピソードをして、旅への誘いとしたのだろう。

日本文学史上、著者によって一から創作された人物の中で、もっとも有名なのは、弥次郎兵衛と喜多八の二人だとよくいわれる。「東海道中膝栗毛」の主人公だ。一般に、弥次・喜多の方が通りがいい。

旅をテーマにした書物は多いが、この作品について知らぬ人はいまい。徹底した楽天主義者の二人が、笑いを誘う失敗を重ねながらも東海道の旅をつづける。江戸を出てから大坂（大阪）遊覧を終えるまでが本来の「東海道」であるが、あまりの人気に打ち止めにもできず、結局、続編がつくられ、中山道を進み、草津温泉に寄ったりして、最終的に江戸へ戻ってくる。

よもやの大ヒットで続編に追われつづけた作者の十返舎一九であるが、この作品の中で二人が江戸に戻ってくるまで、なんと20年もかかっているから、考えてみれば大作だ。

さて、江戸を起点とし、東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道をもって五街道とされる。この中で朝廷と幕府とを結ぶ路線となる東海道が、もっとも重要視された。道幅は、例えば品川あたりでは6〜9mほどの広さであったというから、かなり広い。その分、交通量も多かったということだろう。

駿河湾での漁獲の多いサクラエビ
由比の名産でもある

由比に見る海岸線の風光明媚

歩いて遠い旅をする時代が過ぎ去り、かつての2か月近く掛けた遊覧旅行が新幹線なら2時間半に縮まった東海道。その景観と旅の趣は大きく変わったとはいえ、存分に目を楽しませてくれる名所は多い。

東名高速道路から臨む風光明媚は数多いが、静岡県由比町のあたりでは、大きく海に迫り出して、富士山と海岸線とが織りなす絶景をドライバーたちに与えてくれる。由比は、かつて由井、湯居などと記名され、東海道の宿場町として栄えてきた。幕府転覆を狙った由井正雪の出身地、また、サクラエビの名産地としても知られる。

東名高速は、美しい自然と調和する円曲線を設計の基本にしてつくられた。鉄の力強い構造体がゆるやかな曲線を支えている。海辺に沿って流れるような道筋が、美しい景色の移り変わりを満喫させる。のんびりと歩いての旅は懐かしくも風流だが、こうして高速で走り抜けることによる景観の素晴らしさも捨てたものではない。海岸線を行く解放感、峠を越えたとき、突然目の前に広がるパノラマ。次々と変化していく景色……。

1963年（昭和38年）に名神高速の一部が完成したのが、わが国における高速道路のはじまりだ。オリンピックムードに沸く世相の中、「ハッスル」が流行語となった。やがて69年になって東名高速が開通し、本格的な高速道路の時代を迎える。そして現在、国内の高速道路は、約6,500kmに達しようとしている。高速道路を走っているときに目にする景観は、他では感じられない壮快感と迫力をもって私たちに迫ってくる。高速道路の延長によって、新しい景観が次々と私たちに提供されつづけていると見ることもできる。

弥次・喜多は由比の付近では雨に遭い、見事な景色を楽しむ機会を失った。現在、東名高速の由比付近を通過する車は、毎日約65,000台ほどだという。それだけ多くの人々が、かつては一期一会だった風景に接して、走り抜けている。

由比駅から約2km、旧由比宿の中心に由井正雪の生家がある。代々紺屋を営んでいた。幕府転覆の企てに失敗し、駿河城下（静岡市）にて自決した。ちなみに、弥次・喜多は江戸っ子のように見えて、その実、駿河の生まれだった